蓬左 HÔSA

長久手之図

『銅人経』拓本を探る!?①

蓬左文庫蔵『銅人腧穴鍼灸図経』拓本の研究をはじめるにあたって

立命館大学教授　井上充幸

中国の北宋時代に成立した『銅人腧穴鍼灸図経』(以下、『銅人経』と略称)は、中国鍼灸医学書の重要な古典の一つである。本書は中国国内のみならず朝鮮や日本にも広く普及し、近世東アジア諸国における鍼灸医学の発展に大きな役割を果たした。『銅人経』は木版本や手鈔本などが数多く現存しているが、中でもとりわけ重要なのは、拓本の形で伝わるものである。これは、北宋時代に石碑に刻まれたテクストを忠実に模刻した明代の石碑から採拓したものであり、数あるテクストの中でも最もオリジナルに近い、信頼に足る内容のものである。さらに、元となった明代の石碑はすでに失われているため、その史料的価値は極めて高い。この拓本は、日本国内では蓬左文庫と宮内庁書陵部に一点ずつ所蔵されている(以下、前者を蓬左本、後者を書陵部本と略称)。

蓬左本は、書陵部本には無いいくつかの特徴を備えている。そのうちの一つは、両者の拓本面を比較した場合、蓬左本の方が刷りの状態がよいという点であり、これはおそらく採拓した時期がより古く、その分石碑の状態が良好であったことを意味していると推測される。また、巻頭の「銅人腧穴鍼灸図経」篆刻も蓬左本のみに見られるものである。そうであるにもかかわらず、現在、一般によく知られているのは書陵部本の方である。その主な理由は、書陵部本が奥医師の多紀元簡(一七五五―一八一〇)旧蔵書であること、巻末に彼が附した「拓本鍼灸図経考」によってその来歴が比較的詳細に判明すること、マイクロフィルム写真に基づく影印本および翻刻本の出版、さらにはオンラインでの写真公開がなされ、参照が容易となったことなどによる。これに対して蓬左本は、その来歴を示す文献に乏しく、同一の石碑から採拓されたため当然のことながら、両者の本文テクストに異同がほぼ無く、対校の必要性が認められなかったため、注意を払われる機会が少なかったと考えられる。

ただしそのおかげで、蓬左本は人の手に触れられる機会が相対的に少なく、法帖作品としての作り込み方が丁寧なこととも相まって、ほぼオリジナルに近い姿を保つことができたのも事実であり、そのことは、本誌前号(『蓬左』第一〇四号)の表紙写真ならびに星子桃子(蓬左文庫)氏の解題に見るとおりである。もちろんこれは、蓬左文庫歴代の管理者による丁寧な維持・管理の賜物にほかならず、その熱意と努力に対し、あらためて敬意を表する次第である。

蓬左本のもう一つの特徴として特筆すべきことは、紙背文書の存在、すなわち中国の明の時代に作成された公文書の反故紙が、拓本の裏打ち紙として使用されていることである。蓬左本の実物を閲覧すれば、その裏面に楷書体の漢字を記した料紙が一面に張り込まれていることに、すぐ気づくであろう。ところが、文書の文字面を張り合わせていて、反転した状態の文字しか見ることができないため、これをわざわざ読解してみようとする努力は、これまでほとんどなされてこなかったのである。ただし、裏打ち紙が剥離した箇所からは、年号や官衙の名称などが容易に判読できる。そのため、『名古屋市蓬左文庫漢籍分類目録』七六頁の『銅人経』の項目には「万暦中官牘紙拓本」との注記があり、この表記からだけではその実態がイメージしにくいものの、この拓本の料紙として明の万暦年間に作成された公

文書が使用されているという事実そのものが、実はすでに明示されていたのである。

上記の二つの特徴のうち、とりわけ後者については、かねてより蓬左本の調査を行っていた丸山裕美子（愛知県立大学）・辻正博（京都大学）の両氏がつとに注目するところであった。そして昨年の三月、明清時代史を専門とする筆者と、当時大学院生であった猪俣貴幸（立命館大学）氏を交えて予備調査を開始し、蓬左文庫の全面的な理解と協力のもと、料紙分析の専家である小島浩之（東京大学）・髙島晶彦（東京大学）の両氏を交えてさらなる調査を重ねた。その結果、蓬左本が抱えるいくつかの謎を解明する手がかりを得たと同時に、解決すべき課題についても認識することができた。なお、昨年度の予備調査については、二〇二二年度立命館大学人文科学研究所助成プログラムによる支援を得て実施した。そして今年度からの三年間は、令和五年度JSPS科学研究費助成事業（科研費）基盤研究B（課題番号：23H00661）による支援を受け、筆者が研究代表者となり、丸山・辻両氏および明代官僚制度史の専家である大野晃嗣（東北大学）氏を研究分担者として、小島・髙島・猪俣・星子の四氏を研究協力者として、本格的に研究を展開していく。

私たちの研究の目的は、これまで本格的な研究がほとんどなされてこなかった蓬左本について、その表面（拓本）と裏面（裏打ち紙）の全てを、古文書学的手法も用いて徹底的に分析し、その未だ知られざる史料的価値を明らかにすることにある。具体的には、次の三つの謎の解明を柱として進めていく。

一つ目は、北京で作られたこの拓本がなぜ蓬左文庫にあるのか、という謎である。蓬左本の来歴を解明することによって、一七世紀前半の中国・朝鮮・日本における鍼灸医学知識の伝播と受容の具体相の理解を深めていくことが、大いに期待される。

二つ目は、裏打ち紙に使用された明代公文書にはいかなる史料的価値があるのか、という謎である。明の中央政府に所蔵されていた公文書の実物を読解し、それを通じて明代における文書行政の実態を解き明かすことで、明代官僚制度に対する理解を一層深めていきたい。

三つ目は、蓬左本はなぜ異なる素材の紙によって構成されているのか、という謎である。古文書学的手法により蓬左本の成立過程を解明することで、明の中央官庁における料紙の使い分けと故紙再利用の実態を知ることが可能となるであろう。

そしてもう一つの重要な目的は、蓬左本の保存と将来の修復のために最善の方法を探ることにある。一〇四号の表紙写真をご覧いただくと、その状態は一見良好であるように感じられるかもしれないが、実物を子細に観察すると、至る所に細かい破損や虫食いが広がっており、もはや表面からの補修によって現在の形状を保ち続けていくことは困難な状態であることが分かる。今回、蓬左文庫側から調査・研究の機会を与えていただいたのは、まさしくその問題の解決策を探るためであり、その際の条件として、非破壊は言うまでもなく、蓬左本現物へのコンタクトも極力控えることが提示されている。本研究が、およそ四〇〇年にわたって大切に守り伝えられてきた貴重な蓬左本を、これから先もずっと継承していくためのものであること、そして、蓬左文庫の全面的な理解と協力のもと慎重に進めていかねばならないものであることを、是非ともご理解いただきたいと願っている。

以上、蓬左本の研究を本格始動するにあたり、その発端とこれからの方針について、研究代表者としての立場から略述した。今後は研究の進展に伴い、担当者それぞれから、本誌の記事や蓬左文庫での講演会などを通じて随時その成果を報告していく予定である。今後とも、私たちの活動に対するご理解とご協力を賜りますよう、伏してお願い申し上げる次第である。

のぞいてみよう、名工のお仕事 1

「伊藤満作家資料」とは

名城大学准教授　米澤貴紀

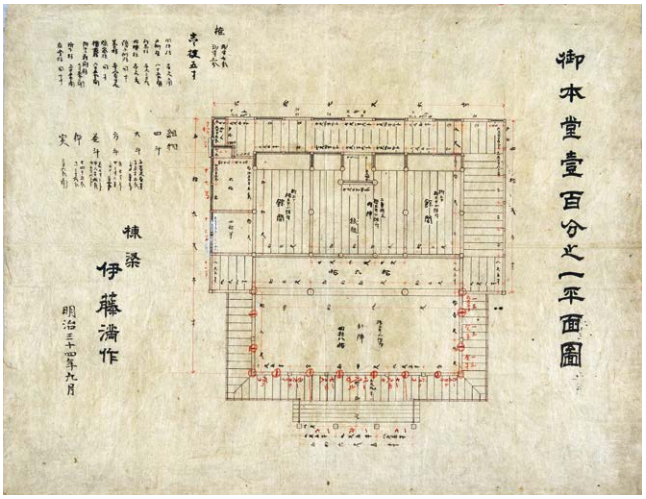
東海地方の名刹、京都の有名な寺院、明治時代の宮殿や洋館。様々な建物を建てた大工の仕事・活動を知ることのできる資料が名古屋市蓬左文庫にある。明治時代に名古屋の名工として知られた伊藤満作（守房、一八五九―一九一四）の家に伝わったもので、子孫の伊藤三千雄氏より寄贈された経緯を持つ。現在、「伊藤満作家資料」と名付けられたこの資料の全容を把握すべく、筆者と名城大学理工学部建築学科米澤研究室が蓬左文庫と協力して、ここに含まれる諸文書、図面の調査と整理、目録作成に取り組んでおり、既調査分からも、本資料が名古屋の名だたる大工の仕事の様子を今に伝える貴重なものであると分かってきている。そこで、これまでに調査した資料から彼らの仕事をのぞいてみたい。本号では、「伊藤満作家資料」なかにはどのようなものがあるのか紹介する。

伊藤満作は、尾張藩に仕えた大工家・伊藤平左衛門家の八代目（守富、一八一四または一八一八―一八七七）の養嗣子となった人物である。同家の九代目は守道（一八二九―一九一三）が継いだが、満作も名古屋工匠界の重要人物として活躍した。この経緯もあり、本資料は八代平左衛門と満作に関わるものが主となっている。前者は江戸時代、後者は明治時代のものが中心となるため、西洋文化の受容という大きな時代の画期を挟んで作成、受け継がれた図面・文書群であることも本資料の興味深い点である。

本資料の中心は図面類であり、伊藤平左衛門家にとって重要な仕事であった東本願寺造営に関するものも含まれている。基本的な図面には指図と建地割図があり、中には長辺が二mを越す大きさのものもある。

指図は、建物の間取りを示したもので、近代の建築図面では平面図と呼ばれる。柱や壁の位置、襖や障子、戸などの建具の場所を記し、各部分の寸法、部屋や場所の名前も書くことが多い。中には、天井・床材の仕様を書いたものや、建物の仕上げ、構造を示す図面も含まれている。指図・平面図は通常一棟ごとに作成するが、敷地内の建物の配置と合わせて各建物の指図を描き広い範囲の様子を記したもの、建物の部分を取り出して詳しく描いたものもある。

建地割図は、建物の立面、または立面と断面を組合せて描いた図面であり、立面の意匠やそれを支える構造を示す役割を担う。後者の描き方は江戸時代以前の大工が用いたもので、本資料でも明治時代のものは、現代の建築図面と同じく立面図と断面図を分けて描くものも表れていて興味深い。断面図には、軒先など重要部分を詳しく描いたものもある。こうした図は建物を正確に造るために欠かせず、大工の設計の仕事が見えて面白い。実際の建設現場との関連性を強く持つのが、実寸で描かれた絵様の図である。絵様とは部材に施す彫刻の文様などの装飾のことで、本資料には、頭貫（柱の頂部に渡す水平材）や虹梁（装飾的な意匠の梁）の木鼻（部材の先端のこと）などの図が含まれている。この実寸図面の大部分に具体的な寺社・建物名が記されて



「御本堂壹百分之一平面図」　蓬左文庫蔵

おり実際の施工に使われたものと考えている。これらには修正が施された図面も多く、大工が最後まで良いデザインを求めていた様子がうかがえる。本資料の絵葉・彫刻の下絵や図案は、当時の大工にとって重要な技能であった細部装飾を記録し、伝えるためのものといえよう。一方、明治時代の図面には洋風建築の細部や家具を記したものも見られ、時代の変化に大工が対応していたことも分かる。

他にも、建具の詳細図や小屋組を示す図面などもあり、大工がどのような図面を作って建物の造営に臨んだか知ることができる。なお、各種図面にみられる特徴と描き方、また時代による変化など、詳しい内容については、次号にて紹介する。

大工棟梁の大事な仕事には、工事の見積もり、監督もあり、それに関する文書も本資料に含まれている。木寄（きよせ）、木寄帳は、造営に必要な木材の寸法と数量を書き上げたもので、木取帳とも呼ばれる。これにより材料費を見積もり、施主へと請求する。また、工事の各工程において必要となる職人の延べ人数（人工（にんく））を算出し、人件費を計上する文書も作成している。江戸時代の造営は、元請けの伊藤平左衛門家など木工大工が、下請けとなる諸分野の専門職人に仕事を発注する、近代の工事に通ずるシステムで行われていた。そのため、工事の全容を把握している責任者である大工棟梁にとって、木取りや人工の計上は重要な仕事であった。

つまり、大工棟梁は工事の中心であり、本資料に含まれる下請け職人との連絡や、施主とやりとりした手紙類、見積書、請求書などから、事業を取り仕切るその仕事振りが見えてくる。なお、名古屋城内小納戸役所の鑑札（明治二年（一八六九）三月）という、伊藤平左衛門が尾張藩の大工であることを示す興味深い品もある。

その他に、本資料には色々な知識の覚書や和算の問題を記した帳面、有名寺社の写真などもあり、大工の興味や勉強についても垣間見ることができる。

本資料に見られる建物は、愛知県内が多いものの、東海地方各地から東京、京都、そして北海道や大分など遠方のものも含まれ、伊藤平左衛門・満作の活動域の広さが分かる。そのなかには、東本願寺、名古屋別院、妙厳寺（豊川稲荷）、高野山や、多賀大社、真清田神社、伊勢皇大神宮、豊国廟などの有名な寺社、また御所や明治宮殿が含まれている。これらの格式高い施主の仕事をしていることは、彼らが高く評価されていたことを示している。もちろん、その家柄から、東海地方における地位は容易に分かるが、全国の、特に天皇家に関わる仕事や、各宗派の本山級寺院、各地の名社から仕事を依頼される名工であったことは改めて知られるべきであろう。本資料はそれを確かめられる点でも価値がある。

「伊藤満作家資料」には、寺社建築もあれば、洋風建築もあり、江戸から明治へという大きな時代の変化が大工の仕事にも新たな潮流をもたらしたことを示している。一方で、建物を建てる仕事には時代が変わっても同じ点の多いことも確かめられる。つまり、大工たちがこの西洋化・近代化を柔軟に受け入れ、乗り越えていけたのは、江戸時代の仕事を通して高い技術力を養い、合理的な建設体制を作り、そうした知識や知恵を確実に継承したためであった。このことは、同じ系譜の大工の仕事を二代にわたって追え、かつそれが大きな時代の画期を跨いでいる本資料であるからこそよく理解できる。これが「伊藤満作家資料」の特徴であり、価値ある点といえよう。次号では、先に記したとおり、大工の描いた図面について、種類や描き方、特徴を詳しく見て、その仕事を観察してみたい。

謝辞　本研究はJSPS科学研究費助成事業（科研費）基盤研究C（課題番号：22K04526）の助成を受けたものである。また、小山興誓（おやまふさちか）氏に多大なご協力を頂いており、改めて謝意を申し上げたい。

俳諧懐紙と千鳥塚（前）

当文庫は『歌仙之俳諧』と題する俳諧懐紙を蔵している（堀田文庫-六七二）。

これは貞享四年（一六八七）十一月七日、鳴海を訪れていた松尾芭蕉を迎え、本陣北向いの嘉右衛門宅で行われた俳諧で詠まれた句を記録したもので、それを百年以上後の寛政八年（一七九六）に木版刷りで板行したものである（百年以上後に板行された経緯については、別途改めて記す）。

この懐紙は、和紙を横長に二つ折し、それを二枚重ねて綴じ、それぞれの面に詠まれた句を記す。一枚目（一ノ折または初折という）の表には六句、裏には十二句、二枚目（二ノ折または名残という）の表には十二句、同裏には六句が記され、合計で三十六句となる。そして末尾に当日の連衆（参加者）で、誰が何句詠んだかが記されている。そして最後に寛政八年板行のことを記す。この板行にかかわったのは、鳴海の旧家、下郷家の七代目当主、知足斎伝芳であり、刊行されたのは寛政八年花朝。花朝とは陰暦二月のことである。（中段写真上、名残裏）

題に「歌仙」とあるのは、この興行（句会を開催すること）で詠まれた句が三十六だったためで、これは古来の有名な歌人、三十六歌仙にちなむ名前である。なお、詠まれる句の数によっては、この半分の「半歌仙」や二倍の「七十二韻」もあり、また切の良い句数で、「五十韻」「百韻」などの会も催されている。

幸いなことに、この板行の元となったと考えられる、原本らしき懐紙も現存しており、その各丁両面を比較対照すると、和紙の大きさは若干異なるが、文字の書き方や表記はほぼ同じであることがわかる（中段写真下、名残裏）。元の懐紙は、おそらく、貞享四年の俳諧興行から、余り間をおくことなく清書されたものと推測される。俳諧当日は、「執筆（しゅひつ）」役となった人物が司会進行を勤め、あわせて読まれた句を書き取る記録係も担当する。その時の記録を後日清書することは普通のことだったようである。

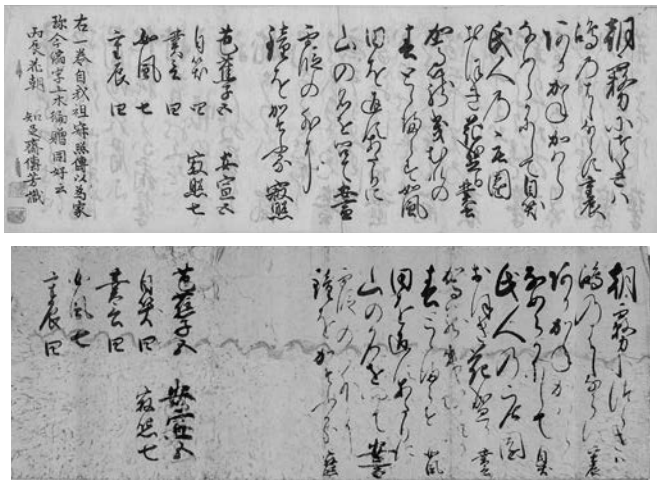
例えば、元禄十五年（一七〇二）八月十九日、当時の下郷家当主、知足は、伊右衛門、加右衛門、自笑、如風等とともに大高の鷲津観音で俳諧を行ったが、その翌日の日記に、

・八月廿日　昨日歌仙清書致シ、観音堂へ溜壱升添遣。

と記す。芭蕉を迎えて行われた歌仙俳諧の懐紙もこのように、開催から日を置かずして、内曇りとよばれる料紙に清書されたものであろう。

芭蕉が「星崎の闇を見よとや啼千鳥」の発句を詠んだこの俳諧に参列した人物を、最初に句を詠んだ順に記すと、安宣、自笑、寂照、業言（ぼくげん）、如風、重辰、以上の六名である。安宣は寺嶋嘉右衛門（加右衛門の表記も多い）で本陣職伊右衛門の弟、自笑は刀工の出羽守氏雲（本名左助）、寂照は下郷家の二代目当主で、鳴海村の惣年寄、俳号は知足で、この「寂照」は天和三年（一六八三）十二月七日夜、思いあまって剃髪した（同月二日に妻のおかめが産後まもなく死去）後の名乗りである。業言は鳴海宿の本陣職を務める寺嶋伊右衛門、如風は鳴海作町にある如意寺の和尚、重辰は鳴海の問屋（といや）職を務める児玉源右衛門である。この六名は鳴海の代表的な連衆で、鳴海六俳仙とも称された人々であった。

幸いなことに、この俳諧興行で詠まれた三十六句はすべて、後年、知足の後を継いだ三代目当主蝶羽（知足の長男）が正徳年間（序文は正徳二年となっているが、実際に刊行されたのは正徳五年九月～十月である）に刊行した『千鳥掛』に収録されたため、そのまま後年編纂された「芭蕉連句集」にも



貞享４年11月７日歌仙之俳諧　名残裏
（上）蓬左文庫蔵（下）個人蔵

収載されて世に知られることとなった。

しかし、改めて俳諧懐紙と千鳥掛及び芭蕉連句集記載の字句を比較すると、句を詠んだ人物の名前に少し違いがあることに気づく。まず、懐紙で「寂照」と記された句は、いずれも俳号である「知足」に統一されている。生前知足は、芭蕉に対しては「寂照」の名で対応していたようで、この点から懐紙にはこの名が残されたと考えられよう。また、最後の句は、千鳥掛・芭蕉連句集では「執筆」となっているが、懐紙では「寂照」となっている。この点から、この俳諧興行で寂照（知足）が執筆役であったことが、判明する。また、さらに大きな違いは、懐紙では「安宣」となっている寺嶋嘉右衛門の俳号が、千鳥掛・芭蕉連句集では「安信」に変更されていることである。この点は、二日前の十一月五日に本陣の寺嶋伊右衛門方で催された俳諧も同じで、千鳥掛・芭蕉連句集に収録されるが、これも元の懐紙が伝存しており（写真下・個人蔵）、先と同様の他に、末句の執筆は、懐紙では「自笑」と記される。なおかつ、この日、芭蕉は「桃青」の名で句を詠んでいるが、この俳号も、千鳥掛では「芭蕉」に統一されている。

貞享４年11月５日俳諧懐紙　名残裏　個人蔵

寂照→知足、桃青→芭蕉の変更はまだしも、「安宣」が「安信」に変更された理由は何であろうか。「知足日記」「蝶羽日記」を丹念にたどっていくと、以下のことが判明する。

知足日記では延宝五年から「安宣」の名が登場し、句を詠む。しかし、元禄十二年十月五日記載の大高海岸寺での歌仙俳諧では、「安信」の名で句を詠んでおり、同年の書状でも「安信丈」（宝永四年蝶羽日記紙背文書中の元禄十二年秋冬頃知足宛書翰）とあり、この年から俳号として「安信」を用い始めている。旧名の「安宣」は元禄十四年二月廿八日の句会まで用いているが、その後はすべて「安信」を用いている。

正徳年間に『千鳥掛』が編纂、刊行される頃、嘉右衛門はまだ存命中であり、「安信」の名で句を詠んでいた。このことが、同書編纂時、すでに用いなくなった「安宣」ではなく、当時現用の「安信」に書き換えた理由なのではなかろうか。

同じような書き換えは、「千鳥塚」でも起きている。現在、名古屋市緑区三王山の千句塚公園内にある千鳥塚は、冒頭紹介した、貞享四年（一六八七）十一月七日の俳諧で芭蕉が千鳥の句を詠んだことに端を発して設置された句碑である。この句碑の設置時期は記録で明らかになっており、宝暦十四年（一七六四）十二月十一日のことであった。当時の下郷家五代目当主和菊は日記に次のように記す。

・十二月十一日（千鳥塚千句之清書・略）ホソネ二有之千鳥塚石碑、寂照庵和尚塚移りの御経有。済、ホソネ男に釣らせ、此方御供して移る。

・十二月十二日　今日芭蕉翁忌日二付、千鳥塚供養。（出席者略）九つ過ニ御斎相済。夫より三王山上千鳥塚へ不残行く。（不参者略）今日霊供膳。芭蕉翁、知足翁、巽言翁、重辰翁、如風翁、安信翁、自笑翁、〆七人千鳥掛社中。（傍線筆者）

千鳥塚（背面）

芭蕉が没して七十年以上経ったこの年、細根山から石碑を三王山へ移し、『千鳥掛』刊行の端緒となった社中七名を供養した。石碑表面には千鳥塚の名とともに、「武城江東散人／芭蕉桃青」、背面（右写真）には「千句塚」の下に右から順に、「知足軒寂照／寺嶋巽言／同安信／出羽守自笑／児玉重辰／沙門如風」の名が刻まれる。千鳥掛以降、寺嶋嘉右衛門の俳号は「安信」が伝えられるのみであったと理解する他はないであろう。

ところで、この「千鳥塚」なる名称は、宝暦十四年の石碑建立以前にも、日記類や紀行文等に散見される。「千鳥塚」の石碑が登場しない以前の《原・千鳥塚》とは、いかなる存在だったのであろうか。

（蓬左文庫　井上善博）

表紙：図-604　長久手之図（ながくてのず）　1枚　江戸時代　165.4㎝×162.0㎝

長久手之図（ながくてのず）

天正一二年（一五八四）に行われた、織田信雄・徳川家康連合軍と羽柴秀吉軍による小牧・長久手の戦いのうち、四月九日の長久手の戦いに特化した合戦図である。とはいいつつも、北は家康の陣城であった小牧山（現小牧市）、西は名古屋城下にほど近い牧野（現名古屋市中村区）、南は同日朝に攻城戦が繰り広げられた岩崎（現日進市）、そして東はメインである長久手（現長久手市）が描かれており、小牧・長久手の戦いの主要地が収まっている。

絵図中央の矢田川より香流（かなれ）川が分流する辺りから南東にかけての主要地帯は、集落や地形、寺社などが詳細に描かれ、織田・徳川方の布陣状況を朱字と朱線で表し、秀吉方は反対に黒字・黒線で表す。主要地帯の外においては、名古屋城下が黄色の長方形、村々が黄色の楕円で表現され、一見簡略的に思えるが、名古屋城下から延びる各街道（朱線）が通り、川の流れも相まって、位置関係が分かりやすい。また、現代の地図と見比べると、村の位置や川の流れは（瀬違えなどで流路が変更されている箇所もあるが）かなり正確に描かれている。当文庫では、尾張藩から伝わる合戦図や古城図などを多く所蔵しており、長久手の絵図も他に十数点伝来しているが、描き込みや精度はこの『長久手之図』が一番優れている。

さらにこの絵図の特徴をもう一つ挙げるとするならば、家康が陣を敷いた「冨士ヶ根山」（御旗（みはた）山）に、合戦図屏風でもおなじみの金扇の馬印（うまじるし）が描かれていることだろうか。他の武将の馬印は見られず、家康のものだけを描いたことに、作者や依頼者の意図に対する想像がふくらむ。

長久手之図　部分

小牧・長久手の戦いは、家康が秀吉方に勝利したことから、尾張藩は古戦場の保護や調査に力を入れていた。藩士たちも合戦の考察をしたり、物見遊山で訪れて現地の住人に案内をさせたりしており、中には一〇〇回以上も古戦場を訪れた猛者もいたようだ。本図もこうした背景をもって作成されたと考えられる。古戦場を保護し、観光を楽しんだ尾張藩士たちにも思いを馳せながら現地を巡るのも面白いだろう。

（蓬左文庫　加藤千沙）

【参考文献】
『長久手町史』本文編（長久手町史編さん委員会、二〇〇三年）
『長久手町史』資料編一（長久手町史編さん委員会、一九八一年）
『長久手町史』資料編七（長久手町史編さん委員会、一九八九年）
『蓬左』第六一号（名古屋市蓬左文庫、一九九九年）
『蓬左』第七九号（名古屋市蓬左文庫、二〇〇三年）

蓬左通信

近年、所蔵資料の調査研究を外部の研究者やＯＢ職員と共に進めています。今号からは、「銅人腧穴鍼灸図経」・「伊藤満作家資料」についてその成果の一端を紹介していきます。玉稿を寄せていただいた井上先生と米澤先生は、それぞれ下半期に講演会を予定しています。お気軽にご参加ください。どちらも詳細が決まり次第当文庫のＨＰやＴｗｉｔｔｅｒでお知らせします。

ＮＨＫ大河ドラマ「どうする家康」も折り返し。今夏の特別展では、ドラマだけではわからない徳川家康の生涯やパーソナリティを紹介します。当文庫からは、家康が息子義直に与えた駿河御譲本の中でも金沢文庫ゆかりの重要文化財が五件登場します。閲覧室には、家康の関連書籍が読める特設コーナーを設けています。ドラマの展開によって随時変えていますので、展示室のみならず、閲覧室にもぜひ足をお運びください。

（蓬左文庫　星子桃子）

名古屋市蓬左文庫　〒461-0023 名古屋市東区徳川町1001番地　TEL（052）935-2173　FAX（052）935-2174
ホームページ　https://housa.city.nagoya.jp/〈蔵書検索もできます。〉

ご利用案内

■**休館日**／月曜日（祝日・振替休日のときは直後の平日）※変更することがあります。
令和5年12月16日㈯～令和6年1月3日㈬は特別整理・年末年始により休館します。
■**展示室**／【開室時間】午前10時～午後5時（入室は午後4時30分まで）
■**閲覧室**／無料　館外貸し出しはいたしません。
【閉架図書】午前9時30分～午前12時　午後1時～午後5時　【開架図書】午前9時30分～午後5時
【複写サービス】保存など支障のない範囲で、CD-Rからのプリントアウトまたはマイクロフィルム複写などの方法により行います。
電話・郵便による申込みも可。

「蓬左」第105号　☆令和5年6月6日発行　☆編集・発行：名古屋市蓬左文庫　☆年2回発行　☆印刷：菱源（株）